

# 原発事故被害者 相双の会

## 連絡先

國分富夫（会長）

## 住所

〒976-0052

福島県相馬市黒木字迎畑 91-12

電話 090 (2364) 3613

メール kokubunpitsu@gmail.com

## 事務局

鈴木宏孝 090-2909-6133（浪江）

関根憲一 090-4889-3726（富岡）

板倉好幸 090-9534-5657（南相馬）

「津島裁判」第10回裁判期日・控訴審原告意見陳述

## 天国に行った母ちゃんの願いをかなえたい —全面的な除染と、公正な判決を

「ふるさとを返せ、津島原発訴訟」原告 窪田たい子

津島裁判では何度か意見陳述をさせていただいたことがあります。前回お話をしたときは、私の義理の母、窪田ツヤの介護がとても辛くて家族が仲良く生活することが大変であったことをお話ししました。

私は義理の母のことを「かあちゃん」と呼んでいました。震災前、とても元気だった「かあちゃん」は、避難生活がはじまってまもなく「要介護」の状態になってしまいました。それでも、なんとか避難生活を耐えてきました。残念ながら、今年の春3月16日に故郷津島へ帰る事が叶わないまま97歳で天に旅経ちました。「かあちゃん」は昔、胃がんの手術を受けたり、心臓が悪くなったりしていましたが、大正、昭和、平成、令和と激動の時代を生き抜き、最後は「羽附」に戻って生活して生涯を終えることが一番の望みでした。私も津島の「羽附」に嫁いってから47年間、世紀をまたいで、頑張って生きてきました。

「かあちゃん」は、原発事故のため避難して環境が変わり、様子がおかしくなり、アルツハイマー認知症になり「要介護3」になってしま

いました。その時は、どうしたらいいのかわからず町役場に相談し、デサービスを使ったりして家族で頑張ってきました。

「かあちゃん」はリハビリだと言って、自分でできることは時間をかけても、身の回りのことを自分でするようにしていました。いつか「羽附」に帰ったときにきちんと生活できるようにしたいとおもっていたのだと思います。

あぶくま山地は、津島五山の一つ「日山」を眺める自然豊かな羽附は、とても住みよい地域でした。原発事故がなければ、今も家族皆で羽附で生活し、田畑や庭を手入れして、自然のありがたさを感じながら過ごしていたでしょ



う。春は山菜、秋はきのこ採りと、私は里山に入って過ごす津島が大好きでした。

原発事故で汚されてしまった故郷であっても、許可を取って津島の家で家族で帰ることは、とても癒されるひとときでした。「かあちゃん」は、荒れ果てた柳の森になってしまった畑や田んぼがジャングルのような里山を見て、ため息をついていました。誰だって羽附での生活は生きがいがありましたし、この荒れ果てた現状を見るとがっかりします。

今年になり、羽附も除染が始まることになり、少しだけ胸を撫でおろしました。これからまだまだ若い私の息子や娘たちからも「羽附に戻るために、力になるから汚れた故郷をきれいにして頑張ろうと言葉をもらい、本当に嬉しかったです。

原発事故から13年も経って、やっと眼の前が明るくなった気がします。故郷へ帰れる日が近づいた気持ちになりました。でも私は古希をむかえる年齢になっています。

私は、病気を患っている夫の介護をしながら協力して生活し、若い世代に世話になり、除染解体をしていただいたら早くから羽附に戻り営農をしたいと思っています。

そんな明るい話が始まった矢先、「かあちゃん」は今年の春亡くなったのです。「かあちゃん」は故郷を失った悲しみや悔しさを人

一倍持っていました。私も家族みんなで「かあちゃん」と羽附に戻り豊かな自然に囲まれて生活したかったです。

私には今、夢があります。羽附の土地を手入れして、花木をたくさん植え直し、自然豊かな浪江町羽附を全国にのみなさんに知ってもらいたいと思います。全国から移住したいと思ってもらえるように、家族や行政区みなさんと力を合わせて復興をしていきたいと思っています。

そして、天国へ逝ってしまった「かあちゃん」にも復興した羽附を見せてあげたかったです。

そのためには、羽附だけでなく、津島全体を田畑と里山を含めて全面的に除染して頂くことが必要です。これまでの除染は限られた数の家屋や道路に沿ってしかしてもらえませんでした。これでは羽附に限らず津島のいろいろな場所での営農や里山での山菜採りなど、かつての生活を取り戻すことができません。

最後に、私たちが生きているうちは、原発事故があったことはよくわかりますが、時間が過ぎれば原発事故の悲惨さが薄れていき、忘れ去られてしまうと思います。このような事故で避難者がでないように裁判官には公正な判決をお願いしたい。どうぞ故郷を取り戻すことにご協力ください。どうかお願いします。

## 6. 23 沖縄「慰霊の日」追悼式

### 高校生・仲間友佑さんの詩への感想（その2）

沖縄での軍拡を止められない私たち自身の責任

東京 福田光一様

「誰かが始めた争い」、詩の中で何度か繰り返されていました。現在、沖縄南西諸島には自衛隊基地の要塞化が進み、ミサイルの配備が進められている。

アメリカとの軍事同盟は強固になり、近隣の国々との緊張感が高められています。また誰かが戦争をはじめようとしているそして、また沖縄が犠牲にされようとしている。

誰かとはもちろん政府です。

しかし、私たち本土の人間が、沖縄の歴史を顧みず、そして現状を軽視し、政府のやる事を止められず、沖縄での軍事拡大が進められてしまうのであれば、戦争を始めようとしている誰かとは、政府だけでなく、私たち本土の人間も含まれることを自覚するべきだろう。私たちは、沖縄の、そして全国の平和を求める人々と団結し、武器ではなく平和憲法こそが最大の抑止力であるとの訴えを広げていく、この詩を読み、その決意をあらたにしました。

### 言葉の一つ一つに感銘

檜葉町 金井直子様

仲間さんの言葉の一つ一つに大変な驚きと共に深く感銘を受けました。18才の青年が、これほどまでに沖縄の悲劇をまるで実際に体験したかのように感受性豊かに表現されていることは、この沖縄で起きた過去の悲惨な歴史を常日頃から積極的に学習し、真剣に未来への教訓として共有し伝承していこうとする強い意志の表れでしょう。

日常の暮らしの中でささやかながらも幸せに生活している人々が守られずに犠牲になる悲劇を、私たちは二度と繰り返してはならないのです。

### 沖縄の少年・少女の発言にいつも驚き

山形市 佐藤光彌様

この動画を見ました。毎年、新聞を切り抜いて取っていますが、起草者は少年・少女です。あの長い文章を原稿なしで堂々と発言する姿に老人の自分はただ驚くばかりです。

毎年、広島平和記念式典や沖縄戦没者追悼式での詩を読んでいると、誰が最も犠牲を背負わされたか、戦争の愚かさや自然の広大な純朴さに気づくことができます。

沖縄戦は、本土決戦を回避しようと意図的に仕組まれたと言われています。

「誰かが始めた争いで、誰のための戦争なのだろう」と、若い人が疑問に思うのは自然なことでしょう。戦後の日本は、「戦争はもう、こりごりだという意識に強く支えられていました。」

しかし、今日の世界は「それでも世界はまだ繰り返している。」

返している。」

今のガザやウクライナをみれば、都市機能の崩壊と悲惨な被害体験、家族や人命の尊さが戦争の愚かさを現実化しています。日本も「防衛」費を2023年度から5年間で1.6倍の総額43兆円程度とすることを閣議決定しています。国会では、「政治の説明が国民の心に響かない」「言葉だけが上滑りし、心に響かない。」

日本をどんな国にしようとしているのか。

### 子どもたちの祈りを一刻も早く実現しよう

東京 弁護士 市野綾子様

私は高校生の仲間さんの親世代の人間であるが、仲間さんの詩の内容は、私の子ども時代にもあてはまる。日本人は、戦争を経験し平和憲法の下での暮らしを選択した。しかしその平和憲法の下での暮らしは、沖縄に危険な基地を押し付け、貧しい地域に原発と核廃棄物を押し付けることで成り立っている。地球のどこかでは絶えず紛争が起き、不条理にも紛争から最も遠い立場の人々が紛争の犠牲になっている。

「七十九年の祈りでさえもまだ足りないというのなら、それでも変わらないというのなら、もっともっとこれからも僕らが祈りを繋ぎ続けよう。」こんな子どもたちの祈りを、大人になった私たちは、一刻も早く実現しなければならない。

### 『平和とは暮らしそのもの』、原発も基地もない。

山形市 辻 春男様

6月23日、石垣島の名蔵公民館の平和祈願祭に参加し民謡・古謡・舞等を堪能し、またマラリア犠牲者慰霊碑に手を合わせる事が出来ました。

あの捨石作戦で沖縄住民の四分の一の命を失った沖縄戦、そして現在も台湾有事中国脅威論を煽り石垣・宮古沖縄各地の軍事要塞化は、誰の為に何を守る為なのか？復興・経済成長・発展の陰で、水俣病、広島・長崎そして福島放射能汚染で身体的・精神的に苦しんでいる大勢の人々がいるのが見えなくされている。

沖縄を学ぶことは日本を学ぶこと、山里節子さんが案内人の石垣島・宮古島の旅に参加できたの

は大きな喜びでした。そして日本という国を知るにはもう一つ「在日問題」がある。経済成長と防衛力強化を進める日本という国のあり方、富裕と貧困を格差・差別・偏見をそのままに支配し続けるまさしく人権後進国の日本、日本という国が益々見えなくなっています。

18歳の仲間さん75歳の自分も共に学び続けましょう。それが喜びです。

### 昭和世代の至らなさを乗り越えてほしい

北海道道北勤医協 ながやま医院 松崎道幸様

1950年生まれの私が高校生だった1969年こう考えていました。

「日本国憲法で日本は戦争をしない国になった。あれほどの悲劇を繰り返したいと思う人々はいないだろう。子どもたちを再び戦場に送るなというスローガンなど今更叫ぶ必要もないだろう...」と。

でも、その55年後に、宮古高校の仲間友佑さんが、「小さな島で起きたあまりに大きすぎる悲しみを、手を繋ぐように受け継いできた。それでも世界はまだ繰り返してる。七十九年の祈りでさえもまだ足りないというのなら、それでも変わらないというのなら、もっともっとこれからも僕らが祈りを繋ぎ続けよう」と叫ばざるを得なかったことに、心底からお詫びを申し上げます。

近世に限っても、戦争が繰り返された理由は、人道に反する悪人を征伐するためではありませんでした。戦争をすることで大きな利益を得る人々がいたことが戦争の推進力だったのです。2024年の現在、日本がアメリカを守るための戦争の準備を急速に進めているのは、日本国民の命を守るためではまったくなく、戦争で巨利を得る人々（巨大企業、軍事産業および政権を握っている政治屋）のためです。

日本では、この「戦争中毒」が親（岸信介）から孫（安倍晋三）まで、連綿として受け継がれてきました。なぜ「戦争中毒」がブロックできなかった

か？ 言い訳になりますが、政権を取った「戦争中毒」勢力がメディアをコントロールした事に最大の原因のひとつがあると思います。

ちなみに、先日の都知事選でも、地元では不人気だった某市の市長が高得票を得たのは、大きな企業の資金と支援によるSNS選挙の「成果」だったことが明らかになりました。

数十、数百億の財力を持つ相手側に対抗して、戦争を防ぐために、私たちは何が出来るでしょうか？ 特効薬はないでしょう。でも、事実を知ることがとても大事だと思います。

### 高齢者も力ある限りがんばる

奈良 いのちと平和を考える会 稲葉耕一様

県民約20万人、米軍によって殺された沖縄戦は、大人も子どもも、家族ごと全てを奪い去られた。学生生徒部隊の追い詰められた自決、泣いたら敵に見つかりと日本軍に殺されたり、敵に捕まるなら自ら死ねと集団自決に追いやられたり、日本軍を守るためにマラリヤ患者をより感染しやすい島に追いやって殺したり、軍隊は住民を守らなかった。

仲間さんの「祖父も母も戦後生まれた」。私は敗戦前に生まれたが戦争の記憶はない。

しかし、沖縄戦で生き残って「懸命に生きてくれた」先輩たちから戦争の実相を学んだ。映画や図書でも学んだ。仲間さんもそうだろう。いくら犠牲者が増えても、始めた戦争をやめることが出来なかった。「誰かが始めた戦争で」。

岸田首相の挨拶は、空々しい、なにも学んでいない。「平和」を言ってるが、やってることは、戦争準備の連続政策だ。大軍拡大増税だ。「中国有事」を煽りつつ、辺野古新基地建設を強行し、南西諸島にミサイル自衛隊基地をどんどんつくっている。いや、本土も、仲間さんのように若い人々が、よりたくさん、反戦平和のために、今後頑張ってくれることを期待します

是非ご投稿をお寄せください ◇電話 090 (2364) 3613

◇メール (國分) kokubunpisu@gmail.com

